GLASS MOVE　　vol.1

現代ガラスに関する研究および“ガラスの街とやま”活動報告　2004.4～2005.3

現代ガラスへの期待

～日本の状況から～　（抜粋）

野入　潤

富山市教育委員会生涯学習課
ガラスの里・ガラス美術館推進班長

現代社会に暮らす我々にとって、ガラスは身近なものである。窓ガラスや蛍光灯の照明管などは、生活する上で欠くべからざるものとなっている。かつてガラスは飾り玉やワインを注ぎ入れる杯、あるいは教会のステンドグラスなど、どちらかと言えば装飾性を意識させるものとして利用されてきた。しかし、20 世紀になってからは、加工技術が格段に向上し、工業品として飛躍的な発展を遂げた。

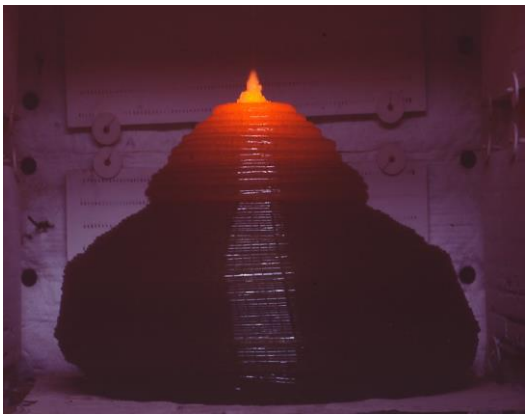
……飛躍的…つまり活用範囲の多様さで言えば、燃料利用だけに止まらなかった石油に次ぎ、鉄、紙などと同等程度に重宝された。言い換えれば、ガラスはそれだけ現代社会で有用視され、以前より格段に拡大・拡散した。しかし面白いのは、プラスチィクの原料が石油であると直感できる人は殆どいないが、蛍光灯の照明管は、何百年前のステンドグラス職人に見せたとしても、即座にガラスと答えるに違いないと思えることである。……我々が『ガラス』という言葉を発する場合、いかに形や色に変化が加えられたものであっても、最終的には固体状のガラス質を意識している。ガラスは物理的あるいは化学的処置により、肌合いや強度上の変化をみせたとしても、他の物質と混じることで全く別物になってしまうということがなく、視覚、触感性において峻別し易い固体で、共通認識が得やすい材質であると言える。

……もしこの認識を覆すとなれば、ガラスを溶かす溶解炉そのものを液体状のガラスごと美術館に展示するなど、何らかの形で知覚の転換を迫る必要があるかもしれない。実際に石川県鶴来町在住の角永和夫氏が、ドロドロ溶けるガラスの様子を写した映像とそのドロドロが自然に積み重なり一つの塊となった物体とをインスタレーション作品として提示していることは興味深い。必要最小限に手を加えることで、その素材の持つ特性を最大限に引き出す作品を中心に制作してきた角永氏らしいアプローチであり、ガラスの素姓ともいえるものが、彼の作品を通して直感させられるとともに、塊となったガラス物体の言い知れぬ迫力にも圧倒される。現代美術の視野でガラスという素材に取り組んだ一つの例と言える。彼にとっては、ガラスを溶かしながら一定時間垂れ流し、積み重なり塊と化した一つの物体を数ヶ月の徐冷の後に窯から取り出すという、この一連のプロセスそのものが作品なのである。また、塊と化したその物体を加工しない点で、明らかに工芸とは一線を画している。ガラスという素材をたまたま扱ってはいるが、本人はガラス作家と名乗ることを拒んでもいる。

現代ガラスは美術の分野としては工芸（クラフト）なのか、それとも芸術（アート）なのかという質問がよくある。（工芸=クラフト、芸術=アートかという言葉自体の意味づけはさておき）……表現を伴う全ての分野がボーダーレス化し、その垣根なども曖昧になりつつある現代においては、ある意味ナンセンスな問いかもしれない。感性も価値観も多様化している時代にあって、この二者択一型の問に、どれほどの意味があるのかとも思えるのだが、そういう所の意識の置き方のようなものが意外に、作家活動を持続していくための拠り所になる事があるとともに、こと工芸王国日本においては、単にスタンスの違いだけでは済まされない場面も多いのかもしれない。……自分はどのようなタイプの作家なのか…、あるいはどのような評価を得たいのか…。自己の創造プロセスに哲学を

含めた思考の基軸を持っているのか…。何事も自由で、誰よりも早い者の勝ちともいえるこの時代においてさえ、この古くさく素人的な問いが時と場合によっては、ある種の本質を見抜こうとする投げ網のような役目を果たしているのかもしれない。しかし、この意味合いを基本姿勢に立ち返ってまで意識し活動している人は、極少数のようにも見受けられる。……器づくりの人、彫刻性を強調する人、インスタレーションとして展開し空間を模索する人、他の材質と併用し素材同士の組み合わせ方で独自性を打ち出そうとしている人、素材は共通こそしているが、そのスタンスはまちまちでありながら、制作の方向性においては互いに無関心で他人の領域への侵入を避けているようにも見える。当然のように、工芸や芸術についての認識の度合いも年々曖昧になりつつある。

……私が見るところガラスを扱うほとんどの作家は、ガラス自体の質感、つまり固体状のガラス質に惚れて仕事をしているし、その加工を前提とした作品を発表している。これはあくまで私見ではあるが、[…狭い意味で捉えれば現代ガラスの分野は、特殊な技術と、素材の加工を前提としている点で紛れもなく工芸といわれるものの仲間である。しかし、ガラスがものづくりのために劇的に開放されたのは歴史的にみてもここ数十年のことであるため、その間の振幅の激しい多くの美術史的エポックと多分に重なり合ったり影響を受けたりしながら共に変化を遂げてきた。それ故に芸術性を追求しようとする姿勢が自然化すると共に、若い人たちは自由度の高い表現領域に憧れを感じ、敢えて工芸家や職人と名乗る人は徐々に少なくなった。これは工芸界全般にも共通したことであろうが、とりわけガラスの世界は、工芸か芸術か、さらにいえばプロダクト・ピースかアート・ピースかのどちらかに位置づけられることによるメリットを最も受けづらい分野なのかもしれない。また、ガラスは素材感において峻別し易い固体ではあるが、その加工方法においては、他の工芸素材よりも格段にヴァリエーションが豊富であり、加工次第によっては視覚面で劇的な差異をもたらす。一方で、透明なるが故に屈折や反射などの効果の面白さを引き出すことも当然可能で、物体の外側のみならず、内側にも自由な空間を形成できる稀有な素材といえる。……恐らくは、この加工法や空間形成方法における守備範囲の広い自由さが、現代という時代が背負っているテーマに符合し、若い人たちを引き付けているし、国内外の力量ある作家達の活躍で、芸術（アート）と呼ぶに相応しい様相も呈している……のではないだろうか。



「Glass No.4 B」
角永和夫
1997
H84.0XW75.0XD60.0 cm
ソリッド・ワーク
富山県教育委員会所蔵